

## 緑川真知子著『源氏物語』英訳についての研究』

マイケル・エメリツク

十年程前に『源氏物語』の翻訳に関する論文や研究書を集中的に読んだ時期がある。その時の印象では、いわゆる現代語訳に関しては刺激的な論考が多いのに対し、日本語以外の言語への翻訳（つまり外国語訳）を扱ったものは、単純な文化比較に陥る傾向があるように思われた。古田菟氏等の共著『源氏物語の英訳の研究』はその一例である。研究対象の英文のみならず『源氏物語』の原文の誤読も多く、根本的などころで翻訳研究とは何か、方法論として何を目指したもののなにかという自覚が薄いように感じられた。英訳を論じているようでありながら、表層的な文化観・言語観を頼りに、原文と訳文、つまり日本語と英語の相違の再確認に紙数が費やされている印象を受けた。

翻訳研究、特に複数の「国語」に跨がる翻訳研究には、必然的にこのような危険性が潜むようである。実際、『源氏物語』の原文と仏訳を論じた『物語構造論』という、相当読み応えのある、示唆に富んだ研究書の著者である中山眞彦氏にも、『源氏物語の英訳の研究』と同様の傾向が認められる。勉強社版『源氏物語講座』第九巻所収の「仏訳源氏物語」という論文に「賢木」から二箇所を引用し、原文と仏訳を比較する件がある。比較の内容その

ものは鋭く、説得力があるが、最終的には「仏訳のような」読み方は、日本の側にはない」または「なんと」「仏訳の」「源氏物語」から「あはれ」が消えるのである」という結論が導かれ、ふたつのテキストが「日本の側」と「フランスの側」を代表するものとして扱われているのである。ここでは詳細を省かせていただくが、中山氏が「日本の側にはない」と主張する「賢木」の当該文に対する読み方は、実は、円地文子の現代語訳にも見られ、与謝野晶子の『新々訳源氏物語』に至っては、なんと仏訳と全く同じように「あはれ」を消滅させているのである。中山氏の述べる「日本の側」は一種の文化的幻想のように思われる。

原文と訳文というテキストを比較検討すること自体は、ふたつの「国語」・文化について何も教示してはくれない。その比較が自他の差異という固定観念の再確認以上の意義をもつためには、まず原文と訳文の特異性を見極める必要がある。具体的に言えば、専門家は『源氏物語』を「日本の側」を代表する標本として扱うのではなく、紫式部が平安朝の貴族社会という政治・言語・経済・性差・文化の文脈の中で練り上げた物語として読解するよう、訳文をも、一人の翻訳者が特定の歴史的な文脈の中で執筆したテキストとして吟味する必要があるのである。訳文に関して言えば、それは要するにどんな人物が、どの時代に、どのような目的で、どういう訳文を準備したかを丁寧に調べることを意味する。

緑川真知子氏の『源氏物語』英訳についての研究』は、徹底してこのような立場に立脚し、厳密な方法論を貫いているという

意味で、『源氏物語』の研究のみならず、日本における翻訳研究、またアーサー・ウェイリーという重要な翻訳家の研究においても極めて大きな達成といえる。『源氏物語』の翻訳に関する研究書として、現時点では他に類を見ない本である。本書は緻密な文献学的アプローチに裏付けられており、過剰な分野の細分化に陥ることなく、日本における日本文学研究の本来の強みを存分に發揮している。淡々と細かい分析を展開させる濃い文章を丁寧に読み進める中で、様々な問題を考えさせてくれる力作である。

本書は三部だての構成をもつ。第一部「『源氏物語』翻訳研究の位置付けと方法」では、まずは全編の方法論・理論的立場を説明し、先行研究を紹介しながら、現代語訳を中心に、そもそも原典に「忠実」であるとは何かという問題を考察する。次の、五章から構成される第二部「ウェイリー訳『源氏物語』の諸相」は、二百ページにも亘っており、本書の核となる部分である。第二部、第一章では、数少ない資料を頼りにウェイリーの翻訳観を探り出し、また小説家ヴァージニア・ウルフの手による有名なウェイリー訳の書評を取り上げる。残りの四章では英国のダラム大学図書館にウェイリーが寄付した蔵書から発見された、ウェイリー自身による書き入れのある『全訳王朝文学叢書』の第八・九巻が主な分析の対象となる。第二章は書き入れの信憑性・概要・内容を鳥瞰的に紹介する。第三章では、『源氏物語』のウェイリー訳の特徴として知られる省略の傾向を、予め本文を咀嚼した上で細かく計算された手法であることを調査をもとに実証する。第四章では、『源氏物語』訳に見られる省略の性格を確認するために、

ウェイリー訳の『枕草子』『虫めづる姫君』『西遊記』における省略と比較し、他書に關しても省略が丁寧に、計算的に行われている、という結論を導く。そして第五章ではウェイリーが「若菜」上下の英訳において、驚くほど細かいテキスト「操作」（本文移動等）を行っていることを検討する。最後に、第三部「『源氏物語』翻訳の諸相」ではウェイリー訳をその他の英訳『源氏物語』の文脈の中に位置づけ、特に和歌の英訳を、和歌英訳の歴史的な変遷の中で考察する。また、それぞれの英訳の散文中の心中表現、談話標識等に対する姿勢にも検討は及ぶ。巻末には索引と参考文献一覧と一緒に『源氏物語』54帖巻名英訳一覧表「ウェイリー訳『若菜』上下の省略部分一覧表」と「ウェイリー全書き入れ一覧表」そして最後に「Coming to Terms with the Alien: Translations of *Genji Monogatari*」と題する英文論文が所収されている。緑川氏は「緒言」の中で、本書の主な目的を「原典回帰」と「受容」という言葉で説明している。原典回帰は「原典の再構築」という意味ではなく、原典の理解と解釈の深化によつてより原典に近づくというぐらいの意味で使う」と付け加えた上で、この二点は「二つの相矛盾する方向を持っている」、即ち「受容されたものへ」と向かう方向とそしてその分析の結果として「原典へ」と立ち帰るといふ二つの方向性」をもつ、と指摘する。確かに、本書に展開される膨大な数の英文の分析を通して『源氏物語』の原文の特性に気付かされるころは多々ある。しかし、筆者の正直な感想を述べさせていざだくと、本書の意義は、原典回帰や受容史への貢献というよりも、むしろ本格的な翻訳研究、何よりもウェ

イリーという人物とウェイリー訳『源氏物語』の研究としての価値にある。緑川氏の方法論は、厳密に言えば「原典から英訳へ、そしてまた原典へ」よりも「訳文から原典へ、そしてまた訳文へ」を志向しているように思う。そして、この志向こそ、あるいは緑川氏の英文の微妙なニュアンスを汲み取り、訳文そのものを直視しようとする真摯な態度こそ、先行研究が陥りがちであった安易な言語・文化比較から、本書を解き放つていようように思われる。

本書が『源氏物語』の英訳を研究対象とするため、日本語の古典を専門とする研究者の中には英訳の分析を十分咀嚼できるか不安を覚える方もいるかもしれない。しかしそれは杞憂である。『源氏物語』の英訳の中から様々な例文を取り出し、ここまで丁寧に、ここまで注意深く、ここまで繊細に、辞書の定義だけでは説明し切れない、ごく細かいニュアンスまで解き明かす著書は、他に例をみない。そして、緑川氏は「緒言」の冒頭に「本書は「中略」英語を母語としない、『源氏物語』を専門とする人間によるものである」と断り、また本文中に「現代の日本人である我々」という言い方をしていることから分かるように、本書は主に日本の読者を想定して書かれている。しかし、英語を母語とする読者なら当たり前のことを、必ずしも英語が読めるとは限らない読者層のために解説しているのではない。英語を母語とする筆者も、調査の結果のみならず、緑川氏の英文そのものの分析から収穫したところは多い。

先程、緑川氏の研究の方向性を「訳文から原典へ、そしてまた訳文へ」と表現したが、次のように言い換えることも可能である。

う。緑川氏は研究対象である英訳を、あくまで訳者の目線で捉え直そうと努めているのだ、と。翻訳という作業は「原文ありき」であるの言うまでもないのだが、訳者にとって、最終的には訳文自体が最も重要な文学作品である。研究者が翻訳を分析・評価する際、訳者の立場を想定することができなければ、大きな誤解に陥る恐れもある。十年前、筆者が『源氏物語』の英訳に関する著述を読みあさった際、英語にはそもそも敬語が存在しないのだから『源氏物語』が英訳できる筈がない、という論文に出会ったことがあった。翻訳者の言語的立場を前提として、緑川氏はロイヤル・タイラー氏による最新の『源氏物語』英訳に関し、この問題に触れ、「厳密な呼称翻訳の区別は、「中略」日本語の敬語表現の英訳文による置き換えという機能を担い、つまり英訳では失われる日本語の敬語体系を補う役割を果たしていると思われる」と指摘する。このような鋭い分析は、本書の随所に見られる。

緑川氏は、大変鋭い読者であり、徹底した研究者である。本書の中核と言える第二部では、ウェイリーが残した僅かな書き入れを極めて緻密な分析を通して、かの有名な英訳『源氏物語』が誕生した過程を、臆げながらも、私たちの前に展開させる。もちろん重厚な本書を通読するには、ある意味、集中力と気力を要する。しかし、その過程で、私は何度か、ウェイリーの英訳に注ぎ込んだ熱意に肉薄すると思う瞬間があった。それは良質な研究書だけが喚起できる静かな感動である。

(二〇一〇年九月 武蔵野書院 A5判 五三三頁 税込二六〇〇円)